

山田守（1894—1966年）は、日本のモダニズム建築の黎明期を築き発展させた建築家である。東京通信病院、東京と大阪の厚生年金病院、日本武道館、京都タワービルなどの設計者として知られている。関東大震災後、復興院の嘱託として聖橋や永代橋も設計した。若いころから言論活動も活発で、大学の学友たちと分離派建築会を結成してこれからの建築は様式建築から脱却すべきと宣言した（1920年）。その考えを逋信省に入省して程なく担当した東京中央電信局（25

年）の設計にて実現し、注目を集めた。

29年8月から翌年5月にかけて欧米に出張し、欧州の新しい建築の動きを学ぶ幸運を得た。視察の様子を収めた16リフィルの第1巻は長く行方不明になっていたが、昨年、山田守の親族宅で見つかった。本紙でも2

## 建設 論評

# 建築家・山田守の慧眼

023年10月11日付で詳報しているが、フィルムにはヴァルター・グロピウス、ル・コルビュジエらの姿や、彼らが設計した建築などが数多く映っており、1930年代の日本の建築家が欧州のモダニズム建築の動向を理解する上で貴重な資料であったことが分かる。

山田守はドイツ滞在中、フランクフルトで開催された第2回近代建築国際会議（29年）に参加し、その議題であった都市労働者のための新しい集合住宅について、帰朝後、「生活最小限の住居」「ドイツのジードルンク」を題して講演も行っている。科学的な知見に基づく合理的な建築設計の手法をわが国の建築界に広めることに、逋信省における設計実務や建築学会などへの論文寄稿により大きく貢献し

た。

終戦を機に逋信省を退職した山田は、設計事務所を開設すると同時に、51年からは東海大学教授としても活躍する。64年、日本建築学会に「首都圏の政治文化を中心とする第二センターを相模平原に建設する計画案」と題した短い論文を発表している。土質（地盤）が良好で、首都機能が集中する東京の中心から高速道路などを整備すれば30分内で到着できる相模原の地に、国会や政府機関の一部を立地させるという提案である。

東海道新幹線の特別ブランチ駅を設けることも提案しているが、まるでリニア中央新幹線の神奈川県駅が橋本に設けられることを予見していたようだ。石炭、重油動力を廃して電力設備

を用いること、グリーン都市とすること、湘南海岸、箱根伊豆の温泉、富士山に近く観光面でもよい場所であることなど、先見性のある意見を述べている。相模原には200秒ほどの広大な土地が戦後、在日米軍の総合補給廠として使用されてきたが、近年その一部が返還され、将来の土地利用計画について検討が進められている。

相模原はJAXA（宇宙航空研究開発機構）のキャンパスが立地し、最先端科学技術の研究開発拠点として発展が期待される地域である。相模原に首都機能の第二センターを設ける山田最晩年の提案は、生涯を通して大局的に建築や社会の進むべき方向を考え続けた建築家・山田守ならではの慧眼であろう。

（誠）

